

乳幼児の言葉の発達と絵本の楽しみ
～「親子で絵本を楽しむ会」の取り組みを通して～

浅井 彰子
伊藤 龍仁

愛知東邦大学

乳幼児の言葉の発達と絵本の楽しみ ～「親子で絵本を楽しむ会」の取り組みを通して～

浅 井 彰 子*
伊 藤 龍 仁**

目次

1. はじめに
2. 乳児期の言葉の発達
3. 幼児期の言葉の発達
4. 乳幼児期における絵本の楽しみ
5. 4歳児の創作絵本から
6. 「親子で絵本を楽しむ会」の実践
7. 「親子で絵本を楽しむ会」と言葉の発達
 - (1) 子どもと大人のコミュニケーション
 - (2) 絵本という言葉
8. おわりに

1. はじめに

絵本は絵と文によって成り立っている芸術である。そして、絵本は子どもが最初に出会う本でもある。

大人といっしょに絵本を楽しむ中で、乳幼児期の子どもたちは想像力を高め、言葉を使うことに魅力を感じ、言葉のやりとりを楽しむ。そして、相手の気持ちに気づき、さらに相手を思いやることができるようになり、コミュニケーションの力を伸ばしていく。

しかし、今日の子どもの取り巻く環境は大きく変化し、子どもの情操やコミュニケーション等の発達にも大きな影響を与えている。その背景には、少子化やあそび場の減少に加え、乳幼児期から手にすることが珍しくないゲーム機やスマホ等の普及など様々な要因が考えられる。人と関わるのが苦手な子どもや、いわゆる「切れやすい」といわれる子どもの増加も、このような子どもを取り巻く環境の変化と無関係だとは考えにくい。

またそれは同時に、子育てをする若い親たちの生活環境や生活スタイルの変化でもある。増加する子ども虐待の背景にあるといわれる「孤立した子育て」の中で、親も子どもも豊かな言葉を介したコミュニケーションが減少しているのではないだろうか。

* 愛知東邦大学非常勤講師

** 愛知東邦大学教育学部

本稿では、前半で子どもの言葉の発達のみちすじ、大人のかかわりと絵本の楽しみについて4歳児の創作を紹介しながら論じ、後半では、岐阜市内の私立A幼稚園で10年にわたって継続している保護者による「親子で絵本を楽しむ会」の実践を取り上げて報告する。この取り組みを通して、幼稚園の保護者がどのように変化し、園児や卒園児がどのように反応したのかを整理する。そこから、絵本がもつコミュニケーションの力、絵本や物語の言葉が子どもの発達に与える影響について考察したいと思う。

2. 乳児期の言葉の発達

子どもが話し言葉、つまり他者を意識した言葉を獲得するのは1歳6か月頃である。しかし言語は突然獲得できるものではなく、胎内にいるころからその準備が始まっているといわれている。

赤ちゃんは胎内にいるときから母親の声を最も頻繁に聞き続けている。生まれて間もない赤ちゃんは高いピッチの女性の声に敏感に反応するということがよく知られている。

乳幼児の発達に詳しい林は、「赤ちゃんは、男性よりも女性、そして同じ女性でも母親の声を好む。生後たった1日の赤ちゃんでも、お母さんの声に強く反応する。胎内は羊水で満たされているため、外界とは音の聞こえ方が異なる。水中にもぐっているときに、外から聞こえる音に近いだろう。ただ、母親の声はからだの内側から響くため、赤ちゃんには聞こえやすい。声そのものというより、話すスピードやリズムなどを覚えていると考えられる」（林 2010）と述べている。

生後まもなくは「泣く」ことで身体の不快な状況を表していた赤ちゃんは、2か月頃になると、「アー」「クー」などの声を発するようになる。これは、心地よさを感じたときに出る音声で、「クーイング」と呼ばれるものである。

クーイングについて秦野は、「養育者はしばしば乳児と対面するかたちを作り出し、目を合わせようと努め、さかんに話しかける。この養育者の言語的な働きかけに対して、乳児はしばしば養育者の口元を見つめ、養育者の口元に引きずられるように口を動かしたり、養育者の話しかけがやむと、ひとしきりクーイングしたりする」（秦野 2001）と説明している。

生後7か月になると、音節を連ね、強弱、高低をつけて喃語を発するようになる。この時期の喃語は「バババ」「ダダダ」といった口や舌を使うことで出る音声で、2音以上のつながりがある。

10か月に近づくと「志向の指さし」が現れる。これは、子ども自身が指をさす行為をするものではなく、相手が指さしたものを目でとらえる動きである。相手を受け入れようとしている姿とも言えよう。

10か月を過ぎる頃から、「マンマンマン」「ブーブーブー」というように喃語の発音がはっきりしてくる。そして、自分の気づいたものを指さす「発見の指さし」が見られ始める。その指さしはしだいに自分が気づいたものを相手に知らせ、共感を求める「定位の指さし」に変わっていく。

理解できる言葉がだんだん増加し、1歳になると「ワンワン」「マンマ」など意味を持ったことばが生まれる。定位の指さしが分化して、相手に要求を伝えようとする「要求の指さし」が出

現するのもこの頃である。

1歳6か月になると、他者に向けた発語、つまり話し言葉が現れるようになる。そして、指さしにおいては「可逆の指さし」が可能になる。愛着のある家族以外に自分にとっての「他者」が広がるこの時期には、相手がだれであっても、聞かれたら知っているものを指さすようになる。また、たくさんの絵の中から目指すものを弁別してみつけだす指のさし方が見られ始める。

「言葉の前の言葉」と呼ばれるように、指さしは動作でありながら、その心的働きは言葉と同じである。1歳6か月児の可逆の指さしの出現は三項関係が成立したあかしとも言える。つまり、「物を介して人とかかわる、人を介してものとかわる」力のめばえである。この三項関係の成立がコミュニケーション力の重要なポイントとなる。

一方で、言葉や指さしの獲得には、自分の思いに共感してくれ、喜びを共有してくれる他者（大人）の存在が影響するといえる。

3. 幼児期の言葉の発達

幼児期は「話しことば獲得期」と表現される。

2歳のころには単語を2つ連ねて表現する二語文が現れる。「パパ、カイシャ」という二語文には「パパが会社に行った」という文法的な構造が含まれており、単に「パパ」と「カイシャ」という2つの単語が並んでいるのではない。つまり、外の世界のとらえ方が変化しているといえる。

語彙数でみると、2歳ころで300前後、2歳6か月ころで500語前後であったのが、3歳になると1000語、4歳で1500～2000語になる。

3歳をすぎると、このように語彙数でも飛躍的な増大が見られるが、質的にも変化が現れてくる。子どもの注意が、言葉のリズムより、意味のほうに向き始めるのである。日常会話に困ることもほとんどなくなる。

4歳になると、幼稚語と呼ばれる稚拙な発音や表現は減少し始める。相手との言葉のやりとりが豊かになり、会話もしっかりしてくる。そして、友だちといっしょに何かを行うことに喜びを見出し始める時期でもある。相談しながら行動する姿が見られるようになる。

5, 6歳の年長組の子どもたちは、「自立」から「自律」へ向かうと言われる。この頃になると、幼児語は消え、言葉を使ったコミュニケーションで他者と交流するのを楽しむ様子が見られる。集団の中で、大人（保育者）を介さずに他児に提案するなど、友だちとのやりとりやかかわりを広げていく。

4. 乳幼児期における絵本の楽しみ

上記のような言語発達のみちすじをたどる乳幼児期の絵本の読み聞かせは、乳幼児の豊かな言葉の獲得に様々な良い影響があると考えられる。そこで、乳幼児の言葉の発達と絵本との関わりを取り上げる。

読み聞かせは生後まもなくから楽しめる遊びである。不安だらけの外界にいる赤ちゃんは、胎内で聞いていた母や父の声を耳元で聞いて安心をする。養育者の語りかけは「スキンシップ」でもある。

2か月過ぎるころから少しずつ反応が出るようになる。「ぶーぶー」「わんわん」「がたがた」「ごーごー」などの擬音語や擬態語が中心でシンプルな絵が描かれている絵本は赤ちゃんの注意もひきやすく、赤ちゃんは絵本を介しての気持ちのやりとりを心地よく感じる。

そして、6か月を過ぎてお座りができるようになった頃のこどもにとっては、絵本は「紙のおもちゃ」でもある。口に持って行ってなめたり、かじったりする。ページをパラパラとめくって遊ぶ姿も見られる。

2歳に近くなるころから、絵本は見たり、読んでもらったりして楽しむものになる。

3歳児は「おむすびころりん すっとんとん ころころころりん すっとんとん」などというリズムカルな言葉のくり返しがあるものを好む傾向がある。何度も同じ絵本を読んでもらっているうちに、1冊まるごと覚えてしまうこともよくある。そして、読み手が間違っただり、とばして読んだりすると、すぐに指摘して読み直させるような姿を示すことがよくある。大人が驚くほどの正確さで言葉に注意を払っている。

そして、4歳になると、言葉のリズムより、意味や内容に関心をもち、登場人物の気持ちを思いやることができるようになる。つまり、登場人物どうしのかかわりあいに関心を示し始める。そして、大人が少々読み間違いをしても気にしなくなる。

理解力、想像力が増す5歳児は、自分をとりまく世界への好奇心が強くなり、絵本の選択にも個性が表れるようになる。興味を示す絵本はさまざまなジャンルにわたるようになる。

5. 4歳児の創作絵本から

ここで『さあちゃんのぶどう』と題された絵本を取り上げ、4歳児の言葉の発達の特徴について考えてみたい。

この絵本テキストは、2000年に開催された子ども読書年記念「子ども創作コンクール」で最優秀賞を受賞した作品である。作者は4歳の女の子であった。全応募作品の中で群を抜いて、満場一致で賞に選ばれたと評にある。絵本作家の福田岩緒が挿し絵を担当して、くもん出版から2001年に絵本として出版された。

以下のようなあらましである。

「さあちゃん」の家の庭にぶどうの木がある。いっぱい実がついている。

母親は「大きくなるまで待とうね」と言い聞かせ、女兒は毎日楽しみに待っている。

さあちゃんの ぶどうが できたよ。

いっぱい いっぱい できたよ。
もっと おおきくなるまで まとうねって、
ママが いったから、
ずっと ずっと まってたよ。

ぶどうはどんどん大きくなっていく。雨の降る日も傘をさしてぶどうを眺め、楽しみにしている。

母親にもう食べられるのかと聞き、母親は、まだまだ青いし、かたいから、むらさき色になるまで待とうと伝える。

一段と大きくなり、むらさき色に変わってきたぶどうを見て、食べてもいいかとたずねる。甘くなるまで、もうちょっと待とうと母親は答える。

そして、ぶどうは食べごろになってきた。保育園が休みのこんどの土曜日に熟したぶどうをとって食べることを「さあちゃん」と母親は約束をする。

果たして、土曜日になった。ところが、ぶどうは少しになってしまった。

どうぶいになったよ。
きょうは、みんなで さあちゃんの ぶどうを、
たべるんだよって いったのに、あれれ一つ。
ぶどうが ちょっとしか
なくなっちゃったよ。
どうして？

しかし、ここで女兒はぶどうがこうなってしまった理由を知っていると表現する。

でもね、ほんとうはね、
さあちゃん しってるんだ。

そして、ぶどうを自分より先にたべてしまったのは誰なのかを想像し、物語を展開する。

ことりさんがね、
かわから とんできて、
つんつんつんって、
つつついて たべていったんだよ。

順々に体の大きな動物を登場させる。

そうしたらね、
ねずみさんも するするって、
ぶどうに のぼってね、
あまい つゆを
ちゅちゅちゅちゅって、
すっていったよ。

りすさんも きたんだよ。
へいから ぴよんって きて、
くちゅくちゅって
ちいさい おくちで たべたんだよ。

おしまいにくまが現れる。

だけどね、
いちばん たくさん たべたのは、
くまさんだよ。
ぶるん ぶるんの つるんって、
ぱくぱく たべちゃったんだ。

ここまで説明を進めて、女兒は悲しくて涙がこぼれたと語っている。

だからね、
さあちゃんの ぶどうが
ちょっとになっちゃった。
かなしくって、
なみだが ぼろぼろ。

そこで、母親が慰める。

でもね、ママが いったよ。
らいねんも またできるからって。

女兒は来年こそは誰よりも先にぶどうを食べることを夢見る。

そうしたら さあちゃん、

いちばん さいしょに
いっぱい いっぱい たべるんだ。

けれども、来年も動物たちにもわけてやりたいと結んでいる。

でも、みんなも また あそびにきてね。
さあちゃんの ぶどう、
ちょっとずつなら わけてあげるからね。

みのしまさゆみ 文 ふくだいわお 絵 (2001)『さあちゃんのぶどう』より抜粋

文中に「ほいくえん」とあるから、女兒はおそらく年中児のクラスにいるのだろう。

4歳になると、大人が返答にこまるような質問を投げかけてくる。「どうして」「なぜ」といった疑問詞でその事柄の仕組みや理由を大人に問いかける姿がよく見られる。

自宅の庭に実ったぶどう。女兒はぶどうを味わうのを楽しみにしていた。しかし、何らかの原因でじゅうぶん実らなかったのか、悪天候が影響してだめになったのか、期待したほどぶどうを収穫することができなかった。

その理由を母親に投げかけたのであろう。そして、母親とのやりとりの中から、自身の納得できる答えをみつめていったのであろうと察せられる。

ぶどうはことり、ねずみ、りす、くまなどの動物たちに食べられてしまったと納得する。さらに、その動物たちも甘いぶどうを味わったのだと気持ちの折り合いをつけようとしている。

ここで、登場する動物たちに注目したい。

ことりの姿を目にする機会は日常の中に容易にあると思われる一方、ねずみ、りす、くまに出会うチャンスはなかなか無い。これらの動物たちに女兒が出会うのは、おそらく絵本などのお話の世界であろう。ふれあったことがない動物たちをお話に登場させ、ぶどうを食べさせている。

そして、ことり、ねずみ、りすは少ししか食べなかった、しかし、体の大きなくまはほとんどを食べてしまった。「だからね、さあちゃんのぶどうがちよっとになっちゃった。」

順序立てた思考の獲得は、5歳の力のめばえであると言える。もちろん、そこには大人のサポートが重要な役割を果たす。あいづちを打ち、「それから?」「つぎはどうなったの?」などの質問をはさみ、「へえ!」「まあ、そうなの!」などと物語の進行を促す役目を大人が果たしていたことであろう。そのように熱心に聞いてくれる母親に物語る形で、このお話は展開し、完成したのではないか。

絵本作家の伊勢英子を妻に持つノンフィクション作家の柳田邦男は、「絵本や物語をたくさん読んでみると、言葉や感性・感情が発達するとともに、物語の文脈理解力も発達する。物語の文

脈理解力は人間関係の文脈理解力につながる」(柳田 2009)と述べている。

ぶどうがなくなってしまったのは残念なことである。自分はいじゅうぶんに楽しめなかった。しかし、動物たちが楽しんだのだ。来年は動物たちに食べられる前に、たくさん食べたい。だが、動物たちにも分けてやりたい。柳田のいう「人間関係の文脈理解力」が育ち始めていることを見ることができる。

6. 「親子で絵本を楽しむ会」の実践

次に、A幼稚園で取り組まれている「親子で絵本を楽しむ会」と名づけられた絵本の読み聞かせ会の実践を取り上げ、そこから幼児の言葉の発達について考察していきたい。

A幼稚園は、周辺に流通業の会社が多く立ち並ぶ岐阜市南西部に位置する私立大学の附属幼稚園である。2017年度の園児数は142人、職員は非常勤職も含めて18人が在籍している。

2008年、筆者の一人、浅井はA幼稚園から子どもたちに向けての絵本の読み聞かせを1時間行ってほしいとの依頼を受けた。そこで、せっかくの機会であるから、父母にも参加してもらって大勢で読み聞かせをしてみてはどうかと園に提案した。

浅井が絵本をテーマに保護者会で講演する機会を作り、園児たち向けの読み聞かせへの参加をその場で呼びかけることになった。講演会后、呼びかけに応じて15人の母親がチャレンジしてみたいとの意志を示した。

メインの作品として『ともだちや』(内田麟太郎 作、降矢なな 絵)を選んだ。きつね、おかみ、くまなどの登場人物のせりふとナレーションを一人ひとりが担当し、劇あそびのように動きも加えて演じることにした。ほかに数冊の絵本に加えて「おおきなかぶ」のエプロンシアターや手あそびも取り入れて変化をつけ、1時間のプログラムを構成した。

そして、数回の練習日を設け、作品ごとに役割を決めて取り組んだ。初めは人前で声を出して演じることにためらう姿も見られたが、練習を重ねるたびに大きな声で思い切った表現ができるようになっていった。

A幼稚園の教職員は、初回の「親子で絵本を楽しむ会」における保護者たちの熱演と演出が想像以上のものだったと高く評価している。それ以降毎年この企画は継続され、今年で10年目を迎えることとなった。中心となる保護者会の役員は毎年メンバーが交代するが、年度末には引継ぎが行われ、新しい役員が前年の取り組みを生かし、さらにアイデアを出し合ってその年の会の運営にあたる。

秋の大きな行事である運動会がすみ、10月の終わりになると、絵本講演会が開催される。浅井は講演のなかで絵本の魅力について述べ、保護者に向けて読み聞かせを行う。ふだんは読む側の保護者たちが聞く側に回ることで、絵本の読み聞かせの喜びを再認識できるようだ。そして講演後に、12月初めに開催される「親子で絵本を楽しむ会」への参加を募る。



エプロンシアター「おおきなかぶ」（中央左が浅井）



おしまいの手遊び（マイク前が浅井）

「親子で絵本を楽しむ会」には、年によっては40人近い保護者が参加を希望する。なかには、子どもが卒園するまでの3年間続けて参加する母親もいる。

初期は浅井が用意した絵本を中心に作品を選定したが、保護者たちにも絵本を選んで提案するように促していった。そうして皆が持ち寄った絵本の中から作品を選び、それぞれの作品ごとに希望を募って朗読グループを作る。

会場である園のホールのステージとフロアをダイナミックに使い、子どもたちをいかに喜ばせるかという観点での演出を工夫する。特に、年長児の保護者たちにはその年をもってこの会からは卒業だとの思いで、長い作品を小道具や衣装を使った劇仕立てにして演じることが定着している。

このようにして「親子で絵本を楽しむ会」は、保護者会にとっても大きな年中行事の役割を担い、親と子どもという二つの集団が絵本をきっかけとしてコミュニケーションを楽しむ場として成長してきた。



2009年『しゅくだい』



2010年のフィナーレ



2011年のフィナーレ



2012年『999ひきのきょうだい』



2013年のフィナーレ



2014年『どろぼうがっこう』



2015年『グリーンマントのピーマンマン』



2016年『かぶとむしランドセル』

7. 「親子で絵本を楽しむ会」と言葉の発達

(1) 子どもと大人のコミュニケーション

子どもの言葉には、言葉の前の言葉としての指さしの出現が大きな意味を持つ。そして、思いや願いを受け止めてくれる大人の存在が支えとなって発声を楽しみ、初語につながっていく。発声に応答し、指さしに共感して、たどたどしい発音であっても伝えようとしたことを喜ぶ大人の姿に励まされ、子どもはもっと伝えようという意欲を持つ。

そのような言葉の発達過程にあつて、絵本は子どもと大人のコミュニケーションのきっかけであり、ツールでもある。紙のおもちゃとしての絵本から、読むための絵本に変わっていく。ばらばらページをめくるのを楽しみながら、子どもが興味を示したページに大人が注意を向け、共有する。やがて、始めから終わりまで、絵本を読み聞かせてもらうことを楽しむ姿が見られるようになる。

日常のできごとを語る言葉の力を獲得した子どもに対し、大人が促しながら聞き役になると、子どもが物語ることができる。順序立てた思考のめばえにもつながる。

「親子で絵本を楽しむ会」では、本番に向けて保護者が何回も顔を合わせて練習する中で、大人どうしの共感が生まれる。互いに聞きあい、アドバイスをしあつて、集団としての力をつけていく。そして、会の当日は絵本を介して子どもたちと集団対集団のやりとりを楽しむ。

子どもたちにとって、もっとも強い愛着関係をとりむすんでいる養育者と離れて過ごす「幼稚園」は自分たちの領域である。その場に、保護者たちが個人ではなく集団として目の前に現れる。それは、子どもたちにとって非日常のできごとであり、ワクワクの体験でもある。保護者が自分とは別の集団に属し、集団の一員として自身の役割を果たす姿にふれて、子どもたちは「集団」という人間関係を学ぶ。それは、すなわち、社会性を身につけるきっかけにもなる。読み聞かせという一つの目的をもった保護者集団の登場は、子どもたちにとって集団性を学ぶ一つのロールモデルを示しているともいえる。

集団対集団の関係性だけでなく、それぞれの集団の中で、あるいは家庭においても相互作用が生じている。保護者たちは、一人ではできない複数での読み聞かせの喜びを共有し、認め合つて励ましを交わす共感の体験を重ねる。子ども集団においては「あ、〇〇ちゃんのお母さんだ」「〇〇くんのお母さん、きつねになつてる」などの会話が交わされ、会が終わつた後も子どもたち間で「親子で絵本を楽しむ会」は話題になるという。また、保護者が自宅練習する際には、我が子を前に演じ、子どもから感想やアドバイスをもらつて、読み方を工夫していく。卒園して何年経つても、この会に母親が出演したことは子どもたちにとって大きな印象を伴つたできごととして記憶され、保護者も誇りを感じると話している。

このように、保護者どうしがその楽しさを共有しながら共同して子どもたちに絵本を読み聞かせるA幼稚園の「親子で絵本を楽しむ会」は、年々参加者が広がり、10年にわたる取り組みとして定着してきた。子どもたちは、読み聞かせを楽しむ大人たちの姿を新鮮にとらえ、絵本への興味がいつそう高まり、お話を聞くのがさらに好きになり、新たな絵本のおもしろさを体験する。

また、保護者が協力して子どもたちに絵本を読み聞かせるというこの取り組みが、孤立しがちな親どうしの交流の機会につながり、子育てに余裕のない若い親たちの子育ての喜びを共有する貴重な場になり得ることを示している。

(2) 絵本の言葉

子どもの言葉の発達には人と人との面と向かつたやりとりが大きく影響を与える。その意味で

も絵本はコミュニケーションツールとして重要な存在である。子どもと大人が絵本を介して思いを交わす。このコミュニケーションは、土岐のいう「ここに身体も心ももった人間どうしが一緒にいて、たしかに通じ合ってるんだという感覚」(土岐 2006)を含んでいる。どのような発達段階にいる子どもも、読み聞かせをしてくれる大人の吐く息とともに発せられる絵本の言葉を楽しむことができる。言葉の意味が理解できない段階にあっても、言葉のリズム、音のおもしろさ、大人の息づかい、そして、何より、その音声が自分に対して向けられているのだという安心感を子どもたちは受け止めるであろう。

また、絵本は子どもたちの実体験の再認識、未知の世界への想像力をふくらます大きな助けの役割も担っている。物理学者アルベルト・アインシュタインは、息子の数学の力をのばしたいと訪ねてきた一人の母親に対して「この子に知性を与えたいなら、お話を語ってあげなさい。そして、この子にかしこくなってほしいのなら、もっともっとお話を語ってあげなさい」と語ったという。

想像力の重要性についてスーザン・ペローは「子どもたちは、夢の世界と現実の世界のはざまに生きているので、物質的世界の『現実』と、夢の世界の『現実』とを、両方とも理解できるのです。そして、この2つのまったく違う世界をつなぐ懸け橋が、『想像力』なのです。この想像の力を使って、子どもたちはいともたやすく、物質的・現実的世界と、夢の世界・お話の世界の間を旅することができるのです」(ペロー 2013)と述べている。そして、それは、土岐のいう「『いま、この場所でたしかに存在する自分』と『未知の世界へと向かって行こうとする未来の自分』とのあいだで揺らぎながら、しかも閉じた自分でなく他者へとつながっているからこそ、おもしろいと感じられる世界」(土岐 2006)に子どもたちが身を置いているということになる。

絵本の言葉は子どもたちにとってまさに二つの世界を橋渡しする「想像力」を育てている。大人自身がゆたかなあそび心をもって絵本の読み聞かせをし、絵本をきっかけとして発展した大人とのやりとりが子どもたちの未知の世界への想像をいっそう促すことになるといえよう。

8. おわりに

本稿で取り上げてきたA幼稚園の「親子で絵本を楽しむ会」は、子どもだけではなく、大人たちの想像力をも刺激し、子どもと大人、子どもと子ども、大人と大人というすべての方向性をもった響きあいを生じさせている。

他者との共有の体験は、言葉に限らず様々な面で子どもの発達に大きく影響する。絵本はその共有の体験を日常的に可能にするツールであると考えられる。そのとき、その場ならではのやりとり、たしかに自分に向けられている声、吟味された言葉の心地よさは、DVDやスマホのゲームでは味わえないものであるだけでなく、想像力を育みながら子どもたちの豊かな言葉の発達をもたらしている。

今後も絵本の可能性を探り、子どもと大人の、そして、「現実」と「夢」の二つの世界をつなぐコミュニケーションツールとしての絵本を活用した実践・研究を続けていきたいと思う。

《引用文献》

- 林洋一（2010）『よくわかる発達心理学』ナツメ社
秦野悦子（2001）『ことばの発達入門』大修館書店
みのしまさゆみ・ふくだいわお（2001）『さあちゃんのぶどう』くもん出版
柳田邦男著・石井麻木写真（2009）『みんな、絵本から』講談社
白澤琢・土岐邦彦『障害児と遊びの教育実践論』（2006）群青社
スーザン・ペロー（尾木直樹監修・須長千夏訳）（2013）『お話で育む子どもの心』東京書籍

《参考文献》

- 戸田雅美（2009）『演習 保育内容 言葉』建帛社
小田豊・芦田宏（2009）『保育内容 言葉』北大路書房
荒木穂積・白石正久（1989）『発達診断と障害児教育』青木書店
小櫃智子・谷口明子（谷田貝公昭監修）（2014）『人間関係』一藝社

受理日 平成29年10月2日